

【後半2から】

《コーディネーター M》

Sさん、せつかく東京からこの会のためだけに来たんだから、話をしてください。

《東京都小学校教員 S》

(一言一言を丁寧に歯切れよく)失礼します。私は東京から来ました。このフォーラムは4回目になります。

私は愛媛県の同和地区に生まれました。この前、小学校の同窓会があつたんですけど、私は担任してもらつてないんですけど、私の姉が3年生5年生6年生と担任をしてもらつていた先生で、その先生が地区出身の先生でした。

姉たちの同級生は单学級の33人で、その中に地区出身の子が6人いました。とてもムードメーカーみたいな人もいれば、勉強しても運動してもちよつと…という子もいました。うちの姉は真面目にはするけど、絶対人前には立ちたくないみたいなそんなタイプの人でした。先生がうちの部落の子たちを学級経営の中心に据えて、この子たちを大事にしていきたいと思ってくださつたんですね。

そこにうちの母とともに共感して、先生と同じ年だったこともあって、凄く厳しく、または温かく過ごさせてもらいました。その人たちが60歳還暦の同窓会があつて、私は、姉がダウン症の子どもがいて、愛媛に連れて帰れないので、「私がお姉ちゃんの代わりに来ました」と言って行つたんですけど、地元で経営をしている人が幹事さんとして、みんなのことを温かく迎えてもらつたりしました。

いろいろ考えていた時に、先生が私たち地区の子を中心に学級経営をしてくださつて、そして、温かいクラスになつたから、こうやってみんなが今でも集まれる。そして、私たち地区の先輩も集まつていて、うちの母姉は集まれなかつたんですけど。

姉が4年、私が2年の時の運動会の8ミリ映像があつたんです。8ミリ映像ですから、今と違つて動きが違うんですね。それをみんなに見せたいと言つて編集をして、ラジオ体操や卒業式場面を自分がピアノを弾いてみんなで見てもらいました。

こんなことができるのも、先生が私たち地区の子たちを大事に思つてくださつて、学習会も始めてもらつたからこそなんだなと思いました。そして、もう一つは、その先生と共に保護者も毎月10日に学習会をしていたんです。これは自発的にです。

それで、中心の幹事になつてくださる方は地区外の方なんんですけど、今でもそこのおばちゃんが私たちのこともすごく大事にしてくださるし、あそこの部落の子がどうだこうだと絶対に言わないような人間関係を、親たちがつくつてくれたからこそ50年目の同窓会なんだなと思いました。

私は今、教員生活36年目なんんですけど、先ほどの27歳の先生の話とか聞くと、ちょうど27歳頃って私はまだ愛媛で教員をしていて、私は、同和教育と平和教育をすごく一生懸命取り組みたいくらいと思っていました。

でも、その後家でいろいろごたごたがあつて、東京の教員試験を受け直して、今東京にいます。今は、昔ここには地区があつたのかなと言われているところに勤務していますが、東京は、どこそこにこういう地区があつたということは、なかつたことにされているので、誰がそんなルーツを持っているのかも全然わからずやっています。だから、私は自分のことを地区出身で言うことは、東京ではできないんですけど、その中でこんな私ができることは何だろうと思いながらいます。

例えばうちのクラスで、書類の書きにくいお母さんがいて、「お母さん、早く書きなさいよ」と言うのではなくて、「じゃあ、お母さんここに来て一緒に書こう」とか「私が家に行って一緒にやるよ」。そういうことなら私にもできることだなという所で、私は27歳の頃は、(弾けるような笑顔でイキイキと)子どもたちの人生に影響を及ぼす教員になるんだっていうくらい、今は恥ずかしくて言えませんが、体力と気力が続く限り、弱い立場の子どもたちに寄り添えるような教員生活を送ろうと思っているんです。

ここに来させてもらってその気持ちを再確認することができました。(自分の前後左右、会場全体に挨拶しながら)皆さんありがとうございました。(拍手)

《コーディネーター M》

皆さん、アツという間の1時間でした。最後にC先生お願ひします。

《1996年度1中学校教員 C》

時間がないようなので簡単に。実は私の意見をいっぱい聞かせていただきて、私もこの会に来るのはパワーになっています。さつきT君からは、人権教育は生き方の追求という話があつたんですが、人権教育は私にとって宗教です。自分を支えてくれるものです。

3年くらい母の介護で教職を離れていたんですが、また、去年から奮い立って教職に戻って、ある先生から「こんな大変な世界に、なんでまた舞い戻って来たんですか？」って聞かれたんですけど、私は自分を成長させるものは、自分の中で本を読んだり、何かをしたり、自分を成長させるものはいっぱいあつたんですが、やっぱり、母が亡くなつて、自分が1人になった時に、自分を鍛えてくれるものとか、自分を支えてくれるものって、人と接する中で生まれてくるものだなと思ったんです。

本を読むつて、本当に知らなかつた世界を自分の中に呼び込んでくれるんですけど、やっぱり中に入るだけで、アウトプットするものがないと、自分を磨けないなと思いました。教職に戻つて、私なんかは特に毎日大変なんんですけど、M先生が横でいてくださつて、毎日毎日勉強をしています。

こういうことがあるよとかいう会話の中で、自分がこの歳になつても鍛えられるというか、そういう場面がたくさんあります。教職に戻つて、また出会う人がたくさんいて、人と触れ合い中というか、会話の中で自分を見つめ直すことができるし、自分を鍛え直せる。

ボーッと老後を楽しく、旅行に行つたり、家族の世話をしたりして過ごしている元同僚たちもいますが、やっぱり、私は自分を磨いてくれる人たち。それが中学生であつたり、同僚たちの若い人たち、M先生であつたり、日々子どもたちの指導のことを悩んでいられる。そういう方と接することで、自分を見つめられる。

磨けるという所で、人権教育をこれからも頑張つていきたいなと思います。喋つてもこんな拙いことしか言えません。前に文章を出していただいたんですけど、恥ずかしくて見られないくらい言葉は幼いです。でも、自分で少しずつ高まつていつている部分がつかめているのが、私は嬉しいので、人権教育は私にとって宗教です。

(会場に笑いがこぼれる)すみません。長くて。(拍手)

《コーディネーター M》

ありがとうございました。時間がなくて高校生はしゃべれませんでしたが、感想をしっかり書いてください。H君から、短く。短く。一言ずつお願ひします。

《パネリスト H》

今日は、私自身が人権教育に携わってきた経験をお話しさせていただきました。この4月からは県教育委員会人権教育課で、各学校を回っていますが、先ほどTさんやNさんのお子さんたちの話を聞き、つらい思いをする子が一人もいない学校現場を実現するためには、今後、教員が果たすべきことを明確に伝えていく必要があると感じています。

正直なところ、現在、学校から提出される人権学習の授業指導案の中には、形式的になつてしまつてあるものも見受けられます。以前の資料や指導案からもつてきたものではなく、今、目の前にいる学級の子どもたちの実態、背景、課題を踏まえ、「子どもたちに対してどのような取り組みを行うか」を深く考えることが重要です。

そして、「子どもたちにどのような力を身につけさせたいか」という明確な目標をもち、すべての子どもたちが輝き、幸せに生きていける授業をめざす必要があります。私自身、こうした授業づくりをサポートしていきたいと考えています。

今日この場で多くの方のお話を聞き、誰もつらい思いをしない社会を目指し、皆で協力していくことの重要性を改めて感じました。本日は私自身も大変勉強になりました。この経験を、今後の学校訪問での指導に生かしていきたいと思います。ありがとうございました。

《パネリスト N》

すみません。今日はありがとうございました。一言でと言いたいところなんですが、先日、僕の家族4人と、ある学校で出会つ

た彼女のお母さんと息子さんがいるんですけど、6人で広島に行って来ました。8月14,15日と行って来ました。

途中、長島愛生園の手前まで行くと、「日本一の駄菓子屋」というところがあります。そこで楽しんで、「このまま愛生園に行こうか」という話をしたんですけど、結局行かずに広島に行って、原爆の資料館を見て来ました。

4日後に、一緒に行った男の子のお母さんからラインが来て、息子が寝て途中で起きたら「お母ちゃん、怖いよ。助けて」と言って5分くらい泣き続けていたと書いてありました。やっぱりすごい現実を見たり聞いたりすると、こういうふうに、純粋で素直で真っすぐで、受け止めやすい子に対して、気をつけなければいけないこともたくさんあるんだなということを感じました。

その男の子は、お母さんだけでお父さんがいないんです。その子がこの前、僕に言ってきたんです。「N君、俺、父さんが欲しいわ」って。子どものそんな言葉を聞いたら、「どうしようか。でも、父さんおらんけど、僕も父さんの代わりもなれるし、父さんの代わりになれる人よおけおるよ。」って言いました。周りの保護者ともそういう理解がある上の付き合い方をしています。

なぜ、こんな話をさせてもらったかと言ったら、T君がさつき言ったように、「地元K町でしんどい思いをしている子がいたら」という話をしてくれました。僕らは人権学習を通して知って、部落問題を知ることでいろんなことを知って、アウトプットして、子どもが悩むかもしれないし、どうなるかわからないけど、言った以上は責任を持って関わり続けるということ。自分の中の人権学習が何ぞやという話をしてくれたんですけど、僕の中では子どもたちと関わり続けることなんです。どういう形であっても。

昨年、400人規模の学校で祭りをしました。PTA会長という立場を利用して。夜のイベントでハードルが高くて、先生の働き方にも左右されつつ、だけど自分たちが想いを込めてやりたい部分もあるし。児童の中には家庭環境で不参加になる子、今の時代と言えば語弊になりますが、不登校の児童もいます。そんな子どもたちが学校だけつながりじゃなく、どこかの隣の町に友だちがいるかもしれない。そういう子たちがつながっている子たちも来れるような状況でやろうと言って、いろいろ楽しいイベントを計画し、800人くらい来ました。

セキュリティとか柔軟にしたつもりなんんですけど、なかなか難しいこともありましたが、地元の初開催の祭りということもあります。不登校だった児童も来てくれました。すると、次の日から不登校だった子が学校に来ているんです。なぜ学校に来れたかを聞いたら、「友だちと一緒に過ごした祭りの1時間2時間がすごくよかった」と言っていて、やってよかったなと思いました。大人の思う「子どもにこうしてあげたい」子どもの思う「こうなりたい」って、価値観が一緒じゃないんですね。

やっぱり、子どもの「こうしたい」に寄り添っていって、包み込むような感じでこれからもいたいと思いますので、人権学習を学んできてよかったです。ありがとうございました。(拍手)

《パネリスト Y》

私からは、短く3つと1つ。(笑いがこぼれる) 中学生集会がなぜなくなったか。やめたかということを話しておきます。教員の人権学習の意識が細ってきた。それによって子どもたちの人権学習への意識も細ってきた。これが大きな原因の1つです。

2つ目、それに関して、教員の意識が細っていくということについて、H先生が言われた自分自身を語らないと本気にならないということがありました。私の話の最初に、「話さなければならることはやっぱり話さなければいけない」ということを言ったと思うんです。

ここ10年位、いろんな若い先生の授業とかに入って話を聞くんですけど、話さない教員が増えました。社会一般でもそうですけど、自分のことを話さない教員が本当に増えました。ましてや自分の言葉ではしゃべりません。教員採用試験をしていますけれども、若い先生に「どんな人権学習をした?」と聞いていますが、99%の若い先生はした記憶がありませんと言います。

その先生が何をします?ということなんです。つまり、記憶に残っている人権学習をしないと、子どもには残りません。記憶の中に残っていない子どもが大人になった時に、人権学習をするかと言ったら、まあ、しません。

だから、2つ目の点で言えば、話をする教員を育てていかなければいけないと思います。それが2つ目です。3つ目、H先生が「恩返し」というワードを言ってくれました。「人権こども塾」資金はゼロです。みんなからかき集めて来ています。それで何とかやっています。

それでもできているのはなぜかということですね。高価なお肉を安く提供してくれたりとか、高価なシャインマスカットを安く提供してくれたり、食材を提供してくれたり、食器類を提供してくれたり、飲み物を提供してくれたり、カンパしてくれたりということがある

からできるんです。

その提供してくれている方はどういう人かというと、みんな学習会関係の人なんです。学習会に関わってきた、学習会でつながってきた人たちなんです。ということは、そこにどんな思いがあるかと言えば、「先生、次につながる人権学習の担い手を大事に育ててよ」というメッセージだと私は思っているんです。

だから、恩返しをまた返す。そういう作業をしているんだと思います。我々もそれをしていきたいなと思います。

最後に1つ。30年というワードを出してきましたけど、最終回の「舟を編む」の最後の台詞にこんな台詞が出てきます。辞書をつくっている編集社で、「言葉は距離を超える、時を超える、大切な何かにつながる役割、役目を見事に果たしてくれるでしょう。」という台詞があるんです。

「T-over人権研究所」の、「互いに越える 共に越える 時を越える」

私たちは、そういう活動をやり続けたいと思います。以上です。

《コーディネーター M》

出会ってきた中学生は生きがいです。希望です。今日来てくれている、「T-over人権研究所」の高校生、希望です。本当に励されます。Sの中学生、本当に希望です。君らが中学生集会をずっと支えてくれました。本当に感謝しかありません。この出会いとつながりを本当に大事にしたいと思います。

Y中学校、C先生よろしくお願ひします。本当に毎日感謝です。ちょっと時間をオーバーしましたけど、本当に素敵な時間が夏休みの締めになりました。本当に力をいただきました。また、1日1日を大事に歩き続けていきたいと思います。

遠くから来ていただいた皆さん、本当にありがとうございました。この出会いとつながりを大事にしながら、交流の輪を広げていきたいと思います。皆さん、本当に今日はありがとうございました。これで終わりたいと思います。(力強く思いを込めて)ありがとうございました！(拍手)

《司会者》

Mさん、パネリストの皆さん、ありがとうございました。閉会にあたりまして、鳴門市人権教育推進協議会会長 Hよりご挨拶申し上げます。

《鳴門市人権教育推進協議会会長 H》

皆様、本当にありがとうございました。閉会にあたりお礼を申し上げたいと思います。コーディネーターのMさん、そしてパネリストのYさん、Nさん、Hさん、本当にありがとうございました。

鳴門の地で、Mさんが実践してきたこと、大切にされてきたことが本当に続いている、このように全国から皆さんのが集まり思いを語り合う。このような時間が持てていることを本当に嬉しく思います。今日はたくさんの大切な言葉をいただきまして、私もこのノートにいっぱい書いて、皆さんと共有したいことをいっぱい書きだしてきましたけど、今、胸の中にある私の想いというか、震える想いというか、それは多分、ご参会の皆様も同じではないかなというふうに思います。

お話しださった方々の一言一言も、本当に胸に響いてきました。差別の現実がある中で、私たちは知った以上、行動していかなければいけないと思います。Mさんの「NKラジオ深夜便」、私もリアルタイムで聞いた一人です。

ふとラジオをつけると、「あれ？」と。まさか全国放送のラジオでM先生の声が聞こえてくると思わず、「あ、M先生の語りだ」と聞き入りました。

でも、私はその時に、全国に、ふとラジオをつけた方や、その「ラジオ深夜便」、私もファンなんですけど、聞いている人がたくさんいると思いました。その時に部落差別の話をしてくださいって、それをなくしていきたいと思っている全国の仲間が、思いがつながった時間になったのではないかなど、私は思います。

「そうそう、私もそう思った」。そんな思いをしている次第です。今日、本当に深い学びをいただきました。今日ご来県の方々の言葉を心に刻んで、私自身の生き方や行動にも生かしていきたいと思います。

本日ご参加の皆様、それぞれの地域で、学校で、お立場で、今日感じた思いを伝えていくつて、そして、みんなで差別をなくしていくんだという、大きなうねりをつくりあげていけたらなというふうに思っております。

これを持ちまして、2025年度鳴門市人権地域フォーラムを閉会といたします。(心を込めて)皆さん、本当にありがとうございました。(拍手)

《司会者》

以上で、2025年度鳴門市人権地域フォーラムを終了いたします。皆様、どうもありがとうございました。
【ご苦労様でした。読んでいただきありがとうございました。おしまい。】